

Wordsworth の崇高について

森 豪

On the Sublime in Wordsworth

Tsuyoshi MORI

Edmund Burke published *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful* in 1757. According to his *Enquiry*, there is a distinction between the sublime and the beautiful. The sublime is the property of an object which appeals to man's instincts of self-preservation and arouses a feeling of terror, while the beautiful is the property of an object which appeals to man's social instincts and arouses a feeling of love. *Enquiry's* characteristic is Burke's psychological and physiological analysis of the effects on man in his aesthetic experience. He restricts his study to sensible qualities of things and refuses to attach importance to imagination and attribute the ultimate cause of aesthetic experience to religion. There is an affinity between Burke and Wordsworth. But Wordsworth is not Burke's disciple. Although Burke finds the distinction, Wordsworth finds the unity based on religion by the imagination. According to Wordsworth's subjective point of view, though feelings aroused by sublime or beautiful objects are different, the same object can become sublime or beautiful, depending on the condition of the subject. When we face sublime objects, we can experience the unity between the objects and the subject which is shown with infinitude by the imagination.

I

パーク(Edmund Burke, 1729-97)は、1757年に *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful* を出版し、1759年には序論として“On Taste”を冒頭に加え、その第二版を出版した。J.T. Boulton は、パークの *Enquiry* のワーズワスへの影響について、“while Wordsworth was no slavish disciple of any aesthetic theory, the pervasive influence of Burke's *Enquiry* on language and habits of observation can not be discounted.”⁽¹⁾と述べている。Boulton の指摘の第一点、ワーズワスが“no slavish disciple of any aesthetic theory”であることを保証するかのごとくワーズワスは、“Burke whose book on the sublime is little better than a tissue of trifles”⁽²⁾と述べ、パークの *Enquiry* を認めていない。その中心的原因は、Blake の“Annotations to Sir Joshua Reynolds's Discourses”⁽³⁾に於けるパーク批判と同じものだと思う。Blake は、若い時ばかりでなく今もパークの *Enquiry* に嫌悪を感じていると述べ、その理由として Blake の“Eternal Dwelling place”である“Inspiration & Vision”をパークが嘲っていることをあげている。要するに想像力的世界の不在に対する批判である。“When we go but

one step beyond the immediately sensible qualities of things, we go out of our depth.”⁽⁴⁾と述べるパークは、Locke 以来の経験主義者であり、人間の生理を重視して“By looking into physical causes our mind are opened and enlarged”⁽⁵⁾と考える感覚論者である。彼も想像力について述べているが、彼の想像力は次のようなものである。

this power of the imagination is incapable of producing any thing absolutely new; it can only vary the disposition of those ideas which it has received from the senses.⁽⁶⁾

彼のこのような、創造力をもたず、主体的能動性もなく、感覚に追従するばかりの想像力を Blake もワーズワスも受け入れることができなかったものと思われる。そしてこの点こそ彼らとパークの根本的な違いである。しかしここで考慮に入れておかねばならないことがある。“Natural Objects always did & now do weaken, deaden & obliterate Imagination in Me. Wordsworth must know that what he Writes Valuable is Not to be found in Nature.”⁽⁷⁾という Blake のことばである。Blake にとっては“Vision”がすべてであった。一方、ワーズワスは“Natural Objects”を見つめるところから出発し、感覚を

重んじ、経験を大切にしたい。このワーズワスの特質を思う時、パークとの関係を Blake と一律にして論じることではできなくなる。その特質にはパークとの類似性が認められるのである。

Boulton の指摘の第二点は、“language and habits of observation”への影響であった。これを明確に示しているのは、*The Prelude* に於ける“Fair seed-time had my soul, and I grew up / Foster'd alike by beauty and by fear”⁽⁸⁾という詩句と次の詩行である。

To fear and love,
To love as prime and chief, for there fear ends,
Be this ascribed ; to early intercourse,
In presence of sublime or beautiful forms,
With the adverse principles of pain and joy⁽⁹⁾

ここに見られる“beauty”, “fear”, “love”, “sublime”, “beautiful”, “pain”, “joy”などのことばは、パークの用語と言ってもよい。パークは *Enquiry* に於て崇高と美を対立概念として考え、恐怖を崇高の、愛を美の中心的要素として分析しているのである。パークの見方(“habits of observation”)の特徴は、崇高と美、恐怖と愛、苦と快などに見られる対立的見方である。引用詩句の対立物の列挙は、パークの見方をワーズワスが継承しているように思わせる。「対立」は、“Natural Objects”と自己との関係に関心をもつワーズワスにとって重要な要素である。しかしワーズワスの見方はパークのものと同じであると言えない。その違いは、先に触れた両者の想像力についての考え方の違いに密接に関係している。本稿の目的は、対立的見方を中心にワーズワスとパークを比較しながら、ワーズワスの未完の美学論文、“The Sublime and the Beautiful”⁽¹⁰⁾を考察することによって、ワーズワスの崇高についての考え方の特色を理解することである。

II

パークの *Enquiry* の特色は、*Enquiry* の研究方法について述べた次の一節に見出される。

I imagined it could only be from a diligent examination of our passions in our breasts ; from a careful survey of the properties of things which we find by experience to influence those passions ; and from a sober and attentive investigation of the laws of nature, by which those properties are capable of affecting the body, and thus of exciting our passions.

⁽¹¹⁾

「感情の検討」, 「感情に影響を与える諸事物の属性の

調査」, そして「属性が身体に影響し、諸感情を引き起こす自然の諸法則の研究」である。言い換えれば、美学的経験に於ける人間の反応の心理学的、生理学的分析である。彼の論の基盤は感覚にある。人間の感覚能力の共通性についてパークは、“as the conformation of their (senses) organs are nearly, or altogether the same in all men, so the manner of perceiving external objects is in all men the same, or with little difference.”⁽¹²⁾と述べ、更に味覚の例をあげて次のように述べている。

All men are agreed to call vinegar sour, honey sweet, and aloe bitter; and as they are all agreed in finding these qualities in those objects, they do not in the least differ concerning their effects with regard to pleasure and pain. They all concur in calling sweetness pleasant, and sourness and bitterness unpleasant.⁽¹³⁾

甘美や苦味による快と苦が美と崇高による快と苦へつながってゆくのが、パークの美学である。そこには、ワーズワスの想像力に見るような人間精神の主体性への関心は見られない。*Enquiry* の序論の“On Taste”で、“the logic of Taste”⁽¹⁴⁾の体系化という *Enquiry* の意図に触れ、その“Taste”は、“Senses”, “Imagination”, そして“Judgment”からなるとしているが、彼の美学経験に於ては、“Imagination”や“Judgment”は殆んど重要な役割を果たしていない。

パークによれば、崇高は人間の「自己保存」(“self-preservation”)本能にうったえ、苦(“pain”)に起源をもつ恐怖(“terror”)の感情を生じさせる事物のもつ属性である。そしてまた、直接でなく間接に、心に苦と危険を思い浮かべる時には、歓喜(“delight”)を生じさせる属性である。歓喜は苦の減少であって、苦と対立的な快(“pleasure”)に依存していない。一方、美は人間の「社会性」(“society”)にうったえ、快に起源をもつ愛(“love”)の感情を生じさせる事物のもつ属性である。苦と快、そして「自己保存」と「社会性」が、「絶対的」に対立するように、崇高と美は、「絶対的」に対立するものである。更にパークは、崇高な事物の属性として、“obscurity”, “power”, “privation”, “vastness”, “infinity”, “succession”, “uniformity”, “magnificence”などをあげている。また美しい事物は、“small”で、“smoothness”, “gradual variation”, “delicacy”などの属性をもつとしている。

ここで英国美学史に於けるパークの美学の特色を見ておきたい。パークの第一の特色である美学的経験の心理学的分析は、John Dennis 以来、David Hume, John Baillie が行ない、パークは Hume の快と苦の原理を受け継ぐと共に心理学的分析を生理学的な面にまで広げた。

そして“whatever is in any sort terrible, or is conversant about terrible objects, or operates in a manner analogous to terror, is a source of the *sublime*”⁽¹⁵⁾とパークが強調した恐怖の感情は、Dennis が恐怖についての分析をして以来、James Thomson が詩にうたい、T.G. Smollet が小説に扱っており、*Enquiry* が出る頃には広く理解されていた感情である。人間の感情的反応を扱う心理学的研究は、主観的傾向の研究である。S.H. Monk は十八世紀の英国美学史を、客観主義(“Objectivism”)から主観主義(“Subjectivism”)への変化、“What sublime qualities does the object possess?”という問いから“‘What effects do so-called sublime objects have on the mind and emotions of the subject?’”⁽¹⁶⁾という問いへの変化としてとらえている。この点から見れば、パークは主観主義的方向にあるが、*Enquiry* は感情的、感覚的反応の materialistic な分析に限られ、想像力や判断力に自主性がなく、十分な主観主義とは言えない。また崇高はあくまでも対象にある属性として考えられており、この点では客観主義である。主観主義の頂点である Immanuel Kant のいう、“the sublime is not to be looked for in the things of nature, but only in our own ideas.”⁽¹⁷⁾からは程遠いのである。

次にパークの特色として指摘したいのは、美学の中心に宗教を置くことを拒否したことである。*Enquiry* には、随所に聖書や宗教的作品への言及が見られる。*Enquiry* のもつ宗教性について彼は次のように言っている。

The more accurately we search into the human mind, the stronger traces we every where find of his wisdom who made it. If a discourse on the use of the parts of the body may be considered as an hymn to the Creator; the use of the passions, which are the organs of the mind, cannot be barren of praise to him,⁽¹⁸⁾

彼は *Enquiry* から「神への讃辞」が生まれるはずであると述べているが、この宗教性は Dennis の宗教性と違っている。Dennis は崇高の根本原因を宗教に求めた。Dennis は *Peri Hupsous (On the Sublime)* で Longinus のいう崇高のもたらず Enthusiasm という効果に注目し、その原因を“Religious Ideas”⁽¹⁹⁾と分析した。Joseph Addison も崇高なものに人間が向かうのは、人間のうちに神がそのような性質を与えたからであるという、これも Longinus にある考え方を継承し、根本原因を神に見出しているのである。パークはそのような宗教性を拒否した。彼は述べる、“When I say, I intend to enquire into the efficient cause of sublimity and beauty, I would not be understood to say, that I can come to the ultimate cause.”⁽²⁰⁾と。根本原因を問わず、彼は“the immediately

sensible qualities of things”に思考を限定する。彼の仕事は、科学者が「重力」の説明をするようなものなのである。

As if I were to explain the motion of a body falling to the ground, I would say it was caused by gravity, and I would endeavour to shew after what manner this power operated, without attempting to shew why it operated in this manner⁽²¹⁾

科学者の分析を志向するパークの美学の世界は、対立の世界である。そしてその世界の普遍的原理は本能であり、その原理は先天的なものであるが、霊的なものとの関わりはない。これに対し、ワーズワスは Dennis や Addison に見られる宗教性を志向し、彼の美学的体験に於て中心的役割を果たす想像力は、“Infinity and God”⁽²²⁾を見出す力であり、Coleridge のいうように“the balance or reconciliation of opposite or discordant qualities”⁽²³⁾に働く力なのである。

Blake のいう“Natural Objects”を見つめることを特質とするワーズワスは、パークの対立的見方を受け入れても、それを外界の自然との関係でとらえている。自然に於ける崇高と美の二面性については早くから言及があり、1790年の妹・Dorothy への手紙の中で、旅行したイタリアの Como 湖の美と Alps の崇高を比較している。

It was impossible not to contrast that repose that complacency of Spirit, produced by these lovely scenes, with the sensations I had experienced two or three days before, passing the Alps. At the lake of Como my mind ran thro a thousand dreams of happiness which might be enjoyed upon its banks, if heightened by conversation and the exercise of the social affections. Among the more awful scenes of the Alps, I had not a thought of man, or a single created being ; my whole soul was turned to him who produced the terrible majesty before me.⁽²⁴⁾

美は、パークの“society”を思わせる“social affections”をうみ出すものと考えられている。しかし Alps の恐ろしい風景を見た時は、人間や被造物のことを考えられず、ただその壮大な風景をうみ出した創造主のことを思ったと述べ、恐怖反応のみに専心したパークにはない宗教性が見られる。

自然の二面性についての描写は、*The Prelude* のもつ中心的な魅力の一つである。それらの描写の特色は、“the immediately sensible qualities of things”に思考を限定したパークと違ってワーズワスが求めた宗教性である。パークは美を“society”に限定し、Como 湖の印象についてワーズワスも同じ意味のことを述べていたが、ワーズ

ワズは美をそれだけに限定していない。少年期に於ける“the eternal Beauty”⁽²⁵⁾との交わりの喜びについて触れているし、「社会」の典型である都市，“blank confusion!”⁽²⁶⁾と叫んだ London の“meagres lines and colours, and the press / Of self-destroying, transitory things”⁽²⁷⁾の中に“The Soul of Beauty and enduring life”⁽²⁸⁾を発見している。美は霊性をも備え、パークが美に結びつけた愛に於ても、ワズワスは“religious love”⁽²⁹⁾を見出しているのである。

また恐怖の感情を生じさせる自然にもワズワスは、宗教性を感じとっている。少年時に彼は、他人の畏にかかった鳥を自分の獲物にした時、低い息吹きや無気味な足音に追いかけられたり、大鴉の巣を襲って激しい風の叫びを耳にし、凄まじい雲の動きを見た。持主に無断でボートを湖に漕ぎ出した時には、巨大な絶壁に追いかけるという恐怖体験をした。これらの体験は盗みの行為に基づいており、道徳意識に起因するものである。その意識は単なる道徳的本能ではなく、“High instincts before which our mortal Nature / Did tremble like a guilty Thing surprised”⁽³⁰⁾であり、霊的、宗教的本能と言われるべきものである。

このような経験を総括して彼は次のように述べている。

The tendency, too potent in itself,
Of habit to enslave the mind, I mean
Oppress it by the laws of vulgar sense,
And substitute a universe of death,
The falsest of all worlds, in place of that
Which is divine and true. To fear and love,
To love as first and chief, for there fear ends,
Be this ascribed ; to early intercourse,
In presence of sublime or beautiful forms,
With the adverse principles of pain and joy,⁽³¹⁾

Iでも述べたようにこの部分は、パークの“language and habits of observation”を思わせる。しかしワズワスの見方は深くっており、列挙された対立物はあくまでも手段にすぎないのである。すべて、引用文で言えば、“this”に帰するのである。目的である“this”とは、要するに、“divine and true”の世界を“a universe of death”に変えてしまう「習慣の惰性」から身を守ることである。パークは、崇高や美の分析に関して、“the laws of vulgar sense”に専心し、“divine and true”の宗教的世界を美学の研究対象とはしなかった。パークは、ワズワスに言わせれば、“Viewing all objects unremittently / In disconnection dead and spiritless / And still dividing and dividing still”⁽³²⁾に努める科学者であり、“An impious warfare with the life / Of our own souls”⁽³³⁾

に従事したのであるといえるだろう。パークの対立は対立のままである。ワズワスはその世界を“a universe of death”であると言う。ワズワスはパークの対立的見方を受け入れているが、そこにとどまらなかった。ワズワスの対立の世界の背後には宗教的世界があり、彼は対立の統一を求めているのである。このようなワズワスの独自性は、“The Sublime and the Beautiful”という論文によく現われているので次にこの論文を考察してみたい。

III

“The Sublime and the Beautiful”は、1811年9月から1812年11月までの間に書かれた manuscript で、the Wordsworth Libraryが title をつけ、Owen と Smyser 編の *The Prose of W. Wordsworth* でもその title が採用されている。この論文の第一の特色は彼の主観主義である。パークは心理学的、生理学的研究を行い、主観的傾向を示したが、崇高や美は客観的の属性であった。ワズワスはパークから感情的側面を継承している。しかしパークと違って想像力による主観の精神的能動性を強調した。論文の最初に彼は“familiarity”について論じているが、それは同時に想像力を重視する彼の態度の表明となっている。“familiarity”は、Addison の“uncommon”なものやパークの“novelty”に対するもので、*Lyrical Ballads* に於て想像力による日常性の打破をとらえたワズワスは、想像力の働きによって“familiarity”をこえて“sublime impressions”をえることができるとしている。

続いて彼は、彼の主観主義のパークとの類似と相違を示している。彼はパークと同じく崇高や美に伴う感情について、“they are not only different from, but opposite to, each other”⁽³⁴⁾と述べ、崇高は“the exaltation or awe”をもたらす、美は“the love & gentleness”を生じさせるので、“daily well-being”の観点から見れば、心は美による“the love & gentleness”に向かうと述べている。そしてワズワスは、“the same object may be both sublime & beautiful”⁽³⁵⁾と述べ、パークとの決定的な相違を明らかにしている。彼は崇高と美の対象を限定せず、一つの対象が崇高と美の両方の性質をもつと考えている。美学的経験に於ける主観の精神状態を重視し、一つの対象が主観によって崇高にもなり、美にもなることを示し、主観に崇高と美の決定権を与えた。パークの場合、崇高や美は対象にある属性であり、崇高な対象と美しい対象とは全く別物で、互いに相容れない、「絶対的」に対立するものであった。主観はそのような対象から刺激を受け、ただ機械的に反応するだけだったのである。

次に彼は崇高論を展開する。⁽³⁶⁾そこで問題となるのは、主観と客観の対立である。そしてその統一をワーズワスは求めている。彼は、崇高感を与える典型的な自然の対象として Windermere の山岳の峰をあげ、その崇高について分析している。彼は論を進めるにあたってこの峰を見る範囲を指定している。遠すぎれば単なる高所としてしか見えない。唯一の対象として、しかも全体が見える程の距離から見なければならぬ。彼は一つの統一体としての姿を求めているのである。このような景観から得られる崇高感には、三要素からなりたっている。“a sense of individual form or forms”, “a sense of duration”, そして “a sense of power” である。これは客観の内に固定して存在する属性ではなく、主観と客観の相互反応の内に主観が感じるものである。これら三要素が関係し、結合しては高められ、“a sympathy & a participation” または “a dread and awe” に至るのである。ワーズワスが重要視するのは主観と客観の相互反応である。主観が一つの統一体であれば、客観も統一体であらねばならない。ワーズワスは London の群衆を嫌ったが、それは群衆が一樣になってしまい、個としての姿を、“individual form” を失ってしまったからである。パークは “Obscurity” を強調し、“Clearness” は全く人に感銘を与えないと述べたが、ワーズワスは “Clearness” を、明確な “individual form” を求めている。そして “individual form” は孤立ではないことを “duration” が示している。“duration” とは “the Earth” との「連続」である。その「連続」感によって存在感が深まり、“power” に結びつけられる。“power” は山岳の “lines” の “motion” から生じる。急な険しい “lines” は危険や突然の変化を現わすと共に互いに海の波のように流れこみあったりして無限に続いてゆく感じを与え、崇高感を高めるのである。

崇高体験に於ける主観と客観の究極の状態は、“sympathy & participation” と “dread and awe” である。ワーズワスはこれらに共通している面が “unity” であると考えている。万象の統一意識と崇高感との結びつきについては、Coleridge も次のように述べている。

the universe itself-what but an immense heap of little things?-I can contemplate nothing but parts, & parts are all little!-My mind feels as if it ached to behold & know something great-something one & indivisible-and it is only in the faith of this that rocks or waterfalls, mountains or caverns give me the sense of sublimity or majesty;⁽³⁷⁾

この “something one & indivisible” との “sympathy & participation” の体験をワーズワスは “Tintern Abbey” で描いている。

I have felt

A presence that disturbs me with the joy
Of elevated thoughts; a sense sublime
of something far more deeply interfused,
Whose dwelling is the light of setting suns,
And the round ocean and the living air,
And the blue sky, and in the mind of man:⁽³⁸⁾

一方、“dread and awe” の場合、主観の状態は “humiliation & submission” の状態である。それに対してワーズワスは、“resistance” というもう一つの立場を考えている。その対立の場合でも彼は単なる分離を嫌い、“opposition & yet reconciliation” の例として “the Rock in the middle of the fall of the Rhine at Chafhausen” をあげている。「Rhine の滝と岩」の例に見る “resistance” は、滝の流れと岩との “resistance” である。ワーズワスは、Rhine 川の永遠の攻撃に対し、永遠に “resist” している岩に、“a modification of unity” としての “infinity” を感じている。その “unity” は数学の “parallel lines” のような統一である。滝と岩は無限に一致しないが、無限に対立し続ける。滝と岩は共に無限の象徴であり、そこから崇高感を得るのである。

“Tintern Abbey” に於ける万象に潜在する、無限なる “something” との合一や Rhine の滝と岩の無限の相の下での統一から得る崇高感には、彼の究極の崇高体験である。そしてその状態は、彼の潜在的な原動力である、無限を志向する宗教意識の充足された状態である。ここにワーズワスの崇高の特色を見ることができる。

最後に、究極の崇高体験に於けるワーズワスの志向した無限性と自己の関係について触れておきたい。彼の場合、主観と客観の関係は緊密であり、客観が無限に変質する時には自己の無限性についての自覚がすでにある。万象に潜在する、無限なる “something” は “the mind of man” にも住まうものであり、それとの合一は自己の内にあるその自覚である。一方、滝と岩に詩人は、無限ばかりでなく主観と客観の象徴を見ているのであり、滝と岩に無限を見出すと同時に自己の無限性を自覚しているのである。1790年の手紙で述べられた Alps の崇高は、M. Moormanによれば⁽³⁹⁾、1799年に書かれた “The Simplon Pass” に具体化し、ワーズワスはその景観を次のように結んでいる。

Tumult and peace, the darkness and the light
Were all like workings of one mind, the features
Of the same face, blossoms upon one tree,
Characters of the great Apocalypse,
The types and symbols of Eternity,
Of first and last, and midst, and without end.⁽⁴⁰⁾

対立物が統一のある無限の様相を呈していると詩人は言う。この“The Simpon Pass”は *The Prelude* に於て Alps 旅行の描写の一部となるが, “The Simpon Pass”とその景観を目にする前に彼が味わった“dejection”⁽⁴¹⁾の体験描写との間に, 想像力体験に於ける無限性についての自覚の描写が加えられている。1804年, *The Prelude* 執筆中, “dejection”についての瞑想の時に想像力の訪れを体験したのである。その想像力について次のように述べている。

to my Soul I say

I recognise thy glory; in such strength
Of usurpation, in such visitings
Of awful promise, when the light of sense
Goes out in flashes that have shewn to us
The invisible world, doth Greatness make abode,
There harbours whether we be young or old.
Our destiny, our nature, and our home
Is with infinitude, and only there;⁽⁴²⁾

この表現によって詩人の自己の無限性についての自覚と“The Simpon Pass”の無限の景観が相並ぶ形となり, “The Simpon Pass”の景観は, 景観の無限性の表現と同時に詩人の自己の無限性の象徴的表現ともなっている。

『1815年詩集』の序文にはかなり明確に理論化された想像力論が展開されるが, そこで彼は, “alternations proceeding from, and governed by, a sublime consciousness of the soul in her own mighty and almost divine powers”⁽⁴³⁾と想像力の変質作用について述べている。自己の神性, 言い換えれば無限性についての“a sublime consciousness”から想像力の変質作用が生じ, 客観が変質するのである。客観の無限化よりも主観の無限性の自覚が先行することが述べられ, “The Sublime and the Beautiful”に於けるよりも一層その主観主義が明確になっている。“Natural Objects”との反応が大切な要素であるワーズワスにとって想像力の基本的世界は次のようなものであった。

a new world, a world, too, that was fit
To be transmitted and made visible
To other eyes, having for its base
That whence our dignity originates,
That which both gives it being and maintains
A balance, an ennobling interchange
Of action from within and from without
The excellence, pure spirit, and best power
Both of object seen, and eye that sees.⁽⁴⁴⁾

この世界は無限を志向する宗教意識を基盤とし, 主観(“eye that sees”)と客観(“the object seen”)が均衡を保

ちながら“an ennobling interchange”によって互いに高揚していく世界であり, 主観と客観との統一の世界である。「自己の無限性についての崇高な意識」はその世界の原動力であり, 更に言えば彼の崇高の源泉なのである。

注

- (1) Edmund Burke, *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful*, ed. J. T. Boulton (London: University of Notre Dame Press, 1958), p. ci.
- (2) R. D. Havens, *The Mind of a Poet* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1941), I. 52. からの引用.
- (3) *Poetry and Prose of W. Blake*, ed. G. Keynes (London: The Nonesuch Press, 1967), p. 809.
- (4) *Enquiry*, pp. 129–130.
- (5) *Ibid.*, p. 5.
- (6) *Ibid.*, p. 17.
- (7) Blake, pp. 821–822.
- (8) W. Wordsworth, *The Prelude* (1805) (Oxford University Press, 1960), I, 305–306.
- (9) *The Prelude* (1850), XIV, 162–166.
- (10) *The Prose Works of W. Wordsworth*, ed. W. J. B. Owen and J. W. Smyser (Oxford University Press, 1974), II, 349–360.
- (11) *Enquiry*, p. 1.
- (12) *Ibid.*, p. 13.
- (13) *Ibid.*, p. 14.
- (14) *Ibid.*, p. 11.
- (15) *Ibid.*, p. 39.
- (16) S. H. Monk, *The Sublime: A Study of Critical Theories in XVIII-Century England* (The University of Michigan Press, 1960), p. 9.
- (17) Immanuel Kant, *The Critique of Judgement*, trans. J. C. Meredith (Oxford University Press, 1952), p. 97.
- (18) *Enquiry*, p. 52.
- (19) *The Critical Works of John Dennis*, ed. E. N. Hooker (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1939), I, 358.
- (20) *Enquiry*, p. 129.
- (21) *Ibid.*, p. 130.
- (22) *The Prelude* (1805), XIII, 184.
- (23) S. T. Coleridge, *Biographia Literaria*, ed. J. Shawcross (Oxford University press, rep. 1973), II, 12.
- (24) *The Letters of W. and D. Wordsworth: The Early*

- Years*, ed. E. D. Selincourt, rev. C. L. Shaver
(Oxford University press, 1957), p.34.
- (25) *The prelude* (1805), I,590.
- (26) *Ibid.*, VII,695.
- (27) *Ibid.*, VII,736.
- (28) *Ibid.*, VII,738-739.
- (29) *Ibid.*, II,376.
- (30) "Immortality Ode", 11.150-151.
- (31) *The prelude* (1850), XIV,157-166.
- (32) *The Excursion*, IV,961-963.
- (33) *Idib.*, IV,967-968.
- (34) *The Prose Works of W. Wordsworth*, II,349.
- (35) *Loc.cit.*
- (36) *Ibid.*, pp.350-357.
- (37) *Letters of S. T. Coleridge*, ed. E.L. Griggs (Oxford University Press, 1956), p.349.
- (38) "Tintern Abbey", 11.93-99.
- (39) Mary Moorman, *W. Wordsworth: A Biography-The Early Years 1770-1803* (Oxford University Press,1957), p.141.
- (40) *The prelude* (1805), VI,567-572.
- (41) *Ibid.*, VI,491.
- (42) *Ibid.*, VI,531-539.
- (43) *The Prose Works of W. Wordsworth*, III,33.
- (44) *The Prelude* (1805), XII,371-379.

(受理 昭和55年1月16日)